

情報共有

(3枚)

非管理メモ

10/12 13:25

公開不可

暫定版

MISA非 ← プレス対応 取扱注意
今作資料

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時：平成 23 年 10 月 12 日 (水) 11:00~11:20

場所：東京電力本館 3 階大会議室

先方：記者約 20 名 (カメラ 3 台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所 2 号機 原子炉格納容器ガス管理システム原子炉建屋内配管設置作業の概要
- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ (10 月 12 日 6:00 現在)

よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑：

Q. 本日福島第一原子力発電所で実施されている大規模余震を想定した訓練について、参加人数は何人程度か。

A. 30 人程度。免震重要棟の緊急時対策本部と物揚場周辺で訓練を実施している。

Q. 本日の訓練では、汲み上げた海水を原子炉へ注水することはないとのことだが、原子炉へ注水する際の手順も確認するのか。

A. 今回の訓練では、高台にある常用ポンプとバックアップ用のポンプ等の電源がすべて使用できなくなったという設定で、消防車を 2 台繋げ原子炉への注水手段を確保するための訓練を行う。なお海から汲み上げた海水は、原子炉へ注水することはできないため、再度水を戻す予定である。ホース等の敷設距離は約 300m 程度を予定している。

Q. 訓練が終わった際には、1 F プレスルームに周知してくれるのか。

A. 周知させていただく。

Q. PCV ガス管理システム設置のスケジュールは予定通りに進んでいるのか。それとも水素ガスが検出されたことで遅れているのか。

A. スケジュールに関わってくるのは、機器の製造・据え付けであり、配管の水素ガスの測定は、当初の予定にはなかったもののスケジュールに影響するものではない。

Q. 本日福島第一原子力発電所で実施されている訓練の参加人数が 30 人とのことだが、その内訳は。吉田所長はじめ幹部も訓練に参加するのか。

A. 指揮命令系統や報告の流れ等もの確認も含めた訓練であることから、吉田所長はじめ発電所幹部も今回の訓練に参加している。

Q. 注水ホースを原子炉建屋につなぎ込みポンプを起動するまでの時間を約 3 時間程度と想定しているとのことだが、今回の訓練も 3 時間程度を見込んでいるのか。

A. 炉心への注水が途絶えた際の温度変化率を1時間あたり約50℃と評価しており、18～19時間後には炉心の温度が1,200℃程度に達すると考えている。従ってその時間内に注水を再開させることが重要であり、作業開始時点から3時間程度で注水を再開させることを目標としている。今回の訓練では敷設するホースの長さが実際より短いことから、約1時間半程度で、配管の敷設や消防車で注水まで実施できるのではないかと考えている。

Q. 実際に炉注水が停止した際、ホースはどの程度敷くことになるのか。

A. 最も長い3号機で1300mほど敷設することになる。

Q. 一部報道によると観光業の風評被害で賠償の対象外としていた減収率20%の撤廃を東電が検討しているとのことだが事実関係は。

A. 中間指針にあるとおり、観光業における減収については、阪神淡路大震災における災害後の観光客数・観光消費額などの減収率等をもとに、3月から8月までの原子力事故以外の要因による減収率を20%と設定させていただいている。

Q. 一部報道のような事実はないということか。

A. 様々なご意見があることは承っており、参考にさせて頂きながら検討していく。

Q. 9月以降については20%の賠償率を撤廃することだが事実関係は。

A. 統計資料の解釈など様々な検討が必要と思うが、現時点では初回請求分については、20%と設定させて頂いている。

Q. 原発事故以外の要因で生じた被害として、減収率から差し引く割合について、後で割合を変更した場合、対象外の割合が遡って0%に基準を変更する可能性もあるとの常務の声もあるが事実関係は。

A. 基準を変更する場合には、公平性確保の観点から過去にお支払いした方についても適切に対応していきたいと考えている。

Q. 今回の訓練は1時間半程度を想定しているとのことだが、注水ホースのつなぎ込みから注水再開までの3時間という目標についても評価に反映するのか。

A. まずは注水システムが使用できなくなった際の手順等に、問題や課題がないかを確認する。また、実際に訓練をしてみて時間が足りているかについては評価の対象になると考えている。なお評価の際には実際に引き回すホースの距離と今回引き回すホースの距離が異なる点も含め評価をしていく。

Q. 事故の教訓を踏まえ、今回の訓練で特に注目している点は。

A. 明日、福島第2原子力発電所でも訓練を行うが、津波が押し寄せた際に炉注ホースの引き回しやポンプの起動などを実際に行う際にどのような困難さがあるかを確認していきたい。また準備しているブルドーザー等で瓦礫処理ができるかについても確認する必要があると考えている。

Q. 今回の訓練ではブルドーザーを使用するのか。

A. 1Fの訓練では予定していないが、明日実施される福島第2原子力発電所の訓練ではブルドーザーの使用を予定している。今回の津波で得た教訓や経験を今後の事故の対応手順に反映させていきたい。

以 上

10/13 9:14 [Redacted]

取説 公開不可

暫定版

情報共有 (7枚 非管理メモ) プラント状況 (本店レク) 議事メモ
NISA班とプレス対応チーム

日時：平成 23 年 10 月 12 日 (水) 18:00~19:20
場所：東京電力本館 3 階大会議室
先方：記者約 25 名 (カメラ 3 台)
当方：原子力・立地本部 [Redacted]
原子力設備管理部 [Redacted]
原子力運営管理部 [Redacted]
広報部 [Redacted]

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所の状況
- ・ 福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析の結果について (第二百一報)
- ・ 福島第一原子力発電所付近の海水中の放射性物質の核種分析の結果について (第九十四報)
- ・ 福島第一原子力発電所取水口付近で採取した海水に含まれる放射性物質の核種分析の結果について (10 月 11 日採取分)
- ・ 福島第一原子力発電所沖合における海底土の放射性物質の核種分析の結果について (続報 28)
- ・ 集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果 (10 月 12 日)
- ・ 福島第一原子力発電所における高濃度の放射性物質を含むたまり水の貯蔵及び処理の状況について (第 16 報)
- ・ 消防車の現場移動状況
- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ (10 月 12 日 12 時現在)

[Redacted] よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑：

- Q. 本日実施した原子炉注水設備損壊を想定した訓練において、敷設作業にかかった時間は。
- A. 消防ホースの敷設および消防車の配備で約 1 時間である。
- Q. 訓練の振り返りはいつ頃を予定しているか。次回の工程表見直し予定である 17 日までに実施するのか。
- A. いつ、どういう形で行うかに関しては未定だが、記憶が薄れないうちに実施したい。訓練自体も継続的に実施していくが、17 日までに決めているものではない。
- Q. 消防車を 2 台直列につないで行ったということだが、発電所には何台配備されているのか。

A. 耐震安全評価を行っており、機能そのものは維持できると考えている。

Q. 耐震安全評価に関して、そもそも3月11日の地震自体で原子炉が損傷していないとの認識だと思うが、観測を正確に行えているのか。

A. 地震の波形はすべて観測できていない。それぞれの号機の観測データをもとに推定を行っている。そのシミュレーション結果で健全性が確保できていると考えている。

Q. 号機ごとのデータで一連の地震の評価できるのか。

A. それぞれの号機における地震の大きさの最大値を基にシミュレーションを実施している。

Q. 2号機可燃性ガス処理系での水素濃度が6.5%と計測されているが、この水素に関しての今後の対応は。

A. 当面はこのままの状態にしておく。1弁は締めてこととしており、配管の接続作業上、1号機のような配管切断作業はないので爆発の危険性はないと考えている。

Q. 酸素や他の要素も計測しているのか。

A. 水素のみ計測している。

Q. 水素爆発のおそれがない根拠は。

A. 内部に蒸気等の着火源がないことである。

Q. 2号機可燃性ガス処理系配管で検出した水素の発生由来は。

A. 燃料損傷によって発生した水素が配管内に進入しているものと考えている。電動弁は閉まっているものの、水素は漏れやすい気体であり、わずかにリークしていたと思う。

Q. 1号機では63%の水素濃度を計測したが、今回6.5%と値が低い理由は。

A. 1、2号機ともに水素ガスそのものが大量に発生していると考えているが、2号機の可燃性ガス処理系配管については配管そのものが格納容器の中に突き出る形で接続されており、水素が進入しにくい形態となっているのでその違いはあると思うが、それだけでは説明がしにくい状況である。

Q. 2号機の当該配管が曲がって上部に立ち上がっており、その部分に水素が貯まる、といった可能性はあるのか。

A. 当該配管については真っ直ぐ横に延びている配管であり、格納容器の中に直径が10cm程度の配管が格納容器の中に突き出る形で接続されており、1号機と比較すると貯まりにくい構造にはなっている。ただ、値が違う明確な理由については不明。

Q. 3号機のガス管理システム設置作業の予定は。

A. 現時点で未定。

Q. 2号機と同じ可燃性ガス処理系配管での作業を予定しているのか。

A. その通り。

Q. ホースの長さで1,300m必要とのことだが、これは1～3号機それぞれを注水する際に必要なホースの長さなのか。

A. 取水する物揚場から一番遠いのは3号機のタービン建屋であり、そこまでのホースの必要長さが1,300mである。

Q. 今回約300mのホースを使用して訓練しているが、これは1号機に該当するというとか。また2号機への注水に必要なホースの長さは。

A. 1号機2号機の必要なホースの長さについては確認する。

Q. 各作業を同時並行で行うことになるので、手順等の改善により3時間にホース敷設作業は完了するというとか。

A. 並行して実施するので3号機については敷設に時間がかかることになるが、津波後のガレキ撤去等を並行して実施することで、3時間以内に敷設可能と考えている。

Q. 一番時間がかかるのは3号機という理解でよいか。

A. その通り。

Q. 2号機可燃性ガス処理系配管が格納容器と接続されている部分の高さは。また格納容器内の全体の水素濃度分布はどのように評価しているのか。また今回の水素濃度の値に関する評価は。

A. 高さは1階から約5m。格納容器内部の状況については、水素濃度は1%未満であり残りは飽和水蒸気と窒素であると考えている。格納容器の形状から考えると、格納容器上部にはフランジがあるがその部分は今回の事故の影響で圧力が上昇しそこから漏れている可能性がある。また配管の貫通口のシール部分からも漏れている可能性がある。格納容器上部については逃げ道がなく水素が溜まっている可能性があると思うが明確にはわかっていない。

水素濃度の評価としては、格納容器内の水素濃度は1%未満と考えているが事故発生時に大量に発生しており、それが配管内に押し込まれたものと思う。

Q. 配管内に高濃度の水素が残っていたということか。

A. 1弁と2弁は閉まったままであり、配管に押し込まれたまま現在に至っていると思う。

Q. 注水設備が損壊した場合、消防車を高台から物揚場に移動させることになると思うが、津波襲来によりガレキが散乱している中で消防車を持つてくることについての検討は実施しているのか。また津波警報が発生している中で復旧作業をすることについての対応はどのように考えているのか。

A. 基本的には30mの高台に消防車を配置しており、津波の影響を受けないようにしているが、大量のガレキが道路を塞ぐ事象が発生するという懸念があったため、ホイールローダーを用意し、その重機で道をあけて消防車を通れるようにしたいと考えている。このような重機は柏崎、1F、2F全てにおいて既に用意されている。

津波警報については、警報が発令されているが原子炉の注水が止まっている時間があるとすると、ある程度の様子を見ながらの復旧作業になると想定している。大きな余震があれば控えることになるが、様子を見て余震がなければ出動し注水の再開作業をする必要があると考えている。

Q. 作業員の死亡に関しては、原子力安全・保安院には正式な報告を受けていないとのことだが、今後報告する予定はあるのか。

A. これまでも作業に伴う事項でない場合は、口頭でもしくは通報で情報共有をしており、特段文書が原子力安全・保安院に提出されている訳ではない。今回も気分が悪くなって入院したことや、医者の診断結果については適宜報告している。

Q. 今後、原子力安全・保安院に正式報告する予定はないということか。

A. 死因については関係各所との調整の上、ご了解が得られれば報告することになるかもしれないが、現時点では特に進展はない状況。

Q. 横浜市内でストロンチウムが検出されたとの報道があるが、東電の見解は。

A. 本件について文部科学省が事故由来かどうかを検証しており、その結果を待ちたいと考えている。ただし、過去の核実験等によるホールアウトのレベルよりも値が大きようなので、今回の事故由来の可能性はあると思う。

Q. 本件について、今後東電が調査する予定はあるのか。

A. 現時点で予定はないが、広域モニタリング範囲を広げるかどうかについては、政府および文部科学省と相談していきたい。

Q. 東電の企業倫理相談窓口の協力企業への周知方法は、また当該窓口の連絡先は東電のホームページに公表しているのか。

A. 協力企業の方に対しては各発電所において安全推進連絡協議会を通じて、あるいはパンフレット等を配布して周知されている。最近については多くの方が作業に従事されており、そのような周知徹底が不十分であったと思う。なお、ホームページには企業倫理相談窓口の連絡先は記載していない。

Q. Jビレッジの掲示板の掲示方法、もしくは東電のホームページへの掲載方法等について改善予定はあるのか。

A. 再度、安全推進連絡協議会を通じてお知らせしていきたい。なお、ホームページへの公開については、広く一般に周知する予定はないので改善の予定はない。

Q. 昨日1号機CCS配管の溶接作業に従事した作業員の被ばく線量は、また何名作業で実施したのか。

A. 最大で5.16mSv。40名作業で実施している。

Q. 配管下部をTig溶接した理由は。

A. Tig溶接は一般的な手法であり、特別な意図はない。

- Q. 5.16mSvの被ばくをした作業員が建屋内にいた時間は。
- A. 配管切断を実施した時間は17時07分～22時30分の約5時間である。また配管上部の養生作業は23時05分～23時10分、配管下部の溶接作業は0時04分～0時37分である。なお、当該作業員がどの作業に従事していたのかについては確認する。
- Q. 配管内に貯まっていた水は切断前に抜いているのか。
- A. 配管切断前にベントラインから水を抜いている。
- Q. 放射性物質の拡散予測については、原子力安全・保安員に報告しているもの以外にシミュレーションと実施した回数は。
- A. 通報連絡しているもので全てであると思うが、確認する。
- Q. 東電社員の健康面・精神面での相談件数が震災前と比較して増えているのか。また、発電所でも同様に相談件数は増えているのか。
- A. 東電社内に関しては、相談件数の集計は実施していないため増減に関しては現時点で不明である。なお、1F内においては防衛医科大によるメンタルヘルスサポートの強化を実施しており、7、8月で103名の相談を受けている。
- Q. 今後、件数を把握する予定はないのか。
- A. 現時点で予定はないが、担当箇所が件数が増えていると判断した場合には経営上の問題として調査する可能性はあると思う。
- Q. ふくいちライブカメラの4月分の映像の中で、1枚存在していない映像があるとのことだが、その理由は。
- A. 詳細は不明であるが、サーバ会社の見解では伝送不良ではないかと判断している。
- Q. 未公開映像に関する調査の進捗は。
- A. 原子力安全・保安院からの要請もあるので、そのような映像があるかどうかについては現在調査中。
- Q. 未公開映像についてはあると考えているのか。
- A. 現場確認する際には写真やビデオカメラ等で映像撮影することは通常業務においてもあることであり、未公開映像としてはありえると考えている。
- Q. 以前発電所で亡くなられた2名の作業員については、原子力安全・保安院に状況報告しているのか。
- A. 適宜、口頭および通報連絡での報告を実施している。
- Q. 東電のホームページの中で、会見で配布した画像について転載する場合は申請が必要との記載があるが、これはいつから記載されているのか。
- A. 確認する。
- Q. 世田谷区の調査において、放射線量が1時間あたり2.7 μ Svを測定したとの報道が

あるが、この件に関する東電の見解は。

A. 自然界にあるレベルを超えている値であり、放射性物質が溜まっている状況ではないかと思うが、詳細がわからないので現時点でそれ以上申し上げることはない。

以上